

# 林海音の『両地』について

天神裕子

## 研究動機

林海音（一九一八―二〇〇二）は、五才から三十才までを民国期の北京に暮らし、戦後台湾に渡ったのち創作を開始した台湾人作家である。一九五〇年代から多くの散文・小説を発表する一方で、『聯合報』『副刊』などの編集を務め、また『純文学出版社』を運営するなど多岐にわたり活躍し、その業績は台湾文壇ではすでに伝説的なものとなっている。しかし、日本においてはそうした活躍や台湾に関する側面はほとんど知られておらず、北京を舞台にした小説『城南旧事』が紹介・評論されるにとどまっている<sup>①</sup>。

なぜ、林海音は関心を持たれなかったのか。一つの要因として、この作家が台湾文学研究の主流から外れていたことが挙げられるだろう。林の創作活動は五〇～六〇年代がもとも盛んであったが、そもそも戦後初期の女流文学は台湾の文学界においてさえ、郷土文学やモダニズム文学などの陰に隠れ、最近まで研究対象となつてこなかった。また、北京で人生の黄金時代を過ごした林の作品にはいわゆる京味儿（北京風味）が色濃く、ますます台湾文学としての関心からは遠ざかったであろう。さらに『城南旧事』が中国大陆で映画化され、このなかで

古都北京への郷愁がことさら強調されたため、林海音は京味兒のイメージが固定化してしまったことも大きい。しかし一方、林の創作には台湾を舞台とした小説もあり、とくに国民政府の文芸政策が盛んだった戦後の台湾で、台湾の民俗に関する散文を多数発表していたことは注目すべきである。

一九六六年に出版された散文集『両地』には、それら台湾を描いた散文が北京を描いた散文とともに収められており、林海音という作家を多面的に知るうえで一読に値する。彼女にとって台湾、北京という二つの場所はどのような存在であり、それはどのように描かれていたのか。本論では『両地』における叙述を手がかりに、林海音の故郷に対する意識について考察する。

## 一、林海音について

林海音は本名を林含音、幼名英子（インツ）、一九一八年に日本の大阪で生れた。父の林煥文は日本統治下の台湾で日本語教育を受けたが、事業を興すため十六歳の妻黄愛珍を連れて日本へ渡り、そこで英子が誕生する。商売は思わしくなく一家は台湾へ戻ったが、一九二三年、煥文は再び新天地を求め、妻子を連れ北京へ渡った。五歳の英子はすぐに北京城南での暮らしに慣れ、七歳で廠甸師範大学第一付属小学校へ入学。だが楽しかった少女時代は父の病死とともに終わり、英子は総領娘として一家を支えるため、働きながら学べる北平新聞専科學校へ入学、十九歳で『世界日報』の記者・編集者となる。一九三九年、同僚の夏承楹<sup>②</sup>と結婚、旧式の大家族に六男の嫁として入り三人の子どもを出産、一九四八年に家族とともに台湾へ渡った。

三十歳で台湾へ戻った林海音は、以降約五十年にわたり文壇で活躍する。編集者・出版人としては一九四九年に『国語日報』『週末』欄の主編、一九五三年から十年間『聯合報』『副刊』の主編を務め、後の台湾文壇を担う

多くの人材を発掘し世に送り出す。七等生、鄭清文、黃春明、林懷民など新人作家のほか、日本語から北京語での創作に移行したベテラン作家たち―楊逵、鍾肇政、鍾理和、廖清秀らも林の支持によって作品を発表した。一九六七年には『純文学』月刊を創刊、さらに六九年純文学出版社を立ち上げ、これと前後して文芸雑誌『文星』の編集も務めたほか、一九六八年から九六年まで小学校の国語教科書編纂も手掛けた。大陸との文化交流が再開されると、一九九〇年には『当代台湾著名作家代表作大系』編纂の顧問となり、台湾文学の紹介に携わった。

作家としての活動は一九五〇～六〇年代が最も盛んで、五〇年代前半は『国語日報』『週末』欄、『中央日報』『副刊』および『婦女与家庭』欄を中心に多数の作品を発表、一九五五年、三十五才のときに、家庭や女性を描いた散文集『冬青樹』を皮切りに小説や散文を上梓する。一九六〇年代には『城南旧事』をはじめ『婚姻的故事』『燭芯』など古い中国の婚姻制度に翻弄される女性たちを描いた作品を発表、ほかにアメリカ訪問記『作客美国』、児童文学『金橋』など三十数冊の散文・小説集をのこしている。

## 二、林海音作品に対する評価―『城南旧事』と『郷愁』の記号

一九五〇年代から一九九〇年代にかけて台湾文壇で多方面に活躍した林海音であるが、その存在はこれまでどのように評価されてきたのだろうか。

台湾においては、林海音は作家としてはもとより、編集者・出版人としても有名である。とくに純文学の重要性を追究し、戦後多くの優れた作家を発掘した功績は、夫・何凡（夏承楹）とともに台湾の現代文学の発展に貢献したと高く評価されている。近年でも二〇〇九年に台湾国立文学館で「穿越林間聽海音——林海音文学展」が行われ、パワフルで多面的なその生涯が詳細な資料をもとに展示された。こうした側面は日本はもとより大陸でも

注目されていないが、それには小説『城南旧事』とその映画化が深く関わっている。

『城南旧事』は一九五〇年代後半に書かれた林の自伝的小説である。「惠安館」「我們看海去（みんな海を見に行こう）」「蘭姨娘（妾の蘭さん）」「驢打滾兒（ロバのころげ回り）」「爸爸的花兒落了（お父さんの花が散った）」という五つのエピソードで構成され、それぞれ中心となる小人物と少女英子のふれあいと別れが、城壁と城門が残る北京を背景に描かれる。各エピソードは『自由中国』や『聯合報』などにバラバラに発表され、一九六〇年に一冊の本として出版された。<sup>(3)</sup> 子どもの視点による生き生きとした描写は秀逸で定評がある。

この作品が発表された一九五〇年代は、いわゆる「反共文学」<sup>(4)</sup>とともに大陸を懐かしむ「懷郷文学」<sup>(5)</sup>が多数書かれた時代だった。内戦に敗れ政府とともに台湾へ渡ってきた第一世代作家たちは「中共が支配する以前の華やかで満たされた大陸での快適な生活を回顧し、このようなノスタルジアによって、台湾の民衆とは何ら関係のない懷郷文学が生まれた」<sup>(6)</sup>。林海音もまた第一世代の女流作家であり、こうしたなかで『城南旧事』も長らく「懷郷文学」とみなされてきた。

一方大陸では、この小説は一九八二年に上海映画製作所の呉貽弓監督によって映画化されてから一躍有名になる。『城南旧事』が兩岸の文化交流再開のなかで映画化された経緯は杉野元子や応鳳凰の論文に詳しい。<sup>(8)</sup> 古き良き北京と少女時代への郷愁を情緒たつぷりに描いたこの映画は国内外で好評を博したが、実は映画版では主人公一家が台湾人だと匂わせる描写はことごとく削除されたため、北京への郷愁だけがクロースアップされてしまったのである。大陸の評論家の間では「林海音は内戦後故郷——台湾に戻ったとはいえ、心は北京に対する「郷愁」でいっぱいであり、『城南旧事』という小説はそうした濃厚な思いが対岸の北京に対する思慕と愛情となって吐露されたもの」<sup>(9)</sup>という見方が生まれた。台湾の研究者たちはこうした読み方を批判しており、范銘如は、小説には英

子一家の台湾人としての特徴的描写——方言や習慣が地元の北京人と異なる部分——があり「そこに描かれる北京は外地／台湾人の目線によって浮き彫りにされた他者<sup>(10)</sup>」だと指摘する。また応鳳凰はこの小説について「実際には小説の「中国の記号」はきわめて弱い<sup>(11)</sup>」と主張し、この作品を「懷郷文学」だとする従来の見方そのものも否定している。

### 三、異人としての林海音——台湾人コミュニティ

林海音の台湾人としての側面を知るうえで、映画「城南旧事」では抹消されていた北平（民国期の北京）の台湾人について少し説明しておきたい。林海音が両親と北京に渡った一九二三年、故郷台湾は日本の植民地となつてすでに二十八年が経ち、日本語による教育や習慣が普及していた<sup>(12)</sup>。こうした台湾の社会を嫌い、煥文と同様に故郷を脱出し北平に新天地を求めた人々の中には、著名な文学者の張我軍<sup>(13)</sup>などがある。その息子の張光正（筆名・何標）が書いた文章<sup>(14)</sup>によれば、北京には一九二〇年当時、科挙試験のため上京する学生用に建てられた各地方の「会馆」がまだ残っており、それぞれの地方の出身者が利用していた。もとは台湾会馆もあったが、日清戦争以降は閉鎖され、台湾から来た人々は祖先の本籍がある広東や福建の会馆を使っていたという。北京に到着した林一家もその後福建永春会馆、晋江会馆、広東蕉嶺会馆などに移り住んだ。何標によれば一九二〇年代の北京には四十〜五十人の台湾人留学生がいて、信仰や主義はまちまちだったが日本の台湾統治に反対する意思で通じており、一九二一年には台湾島内での日本統治当局に対する闘争を積極支援・連携する目的の「台湾青年会」が結成され、煥文はその一員でもあった。はじめ京津日日新聞社北京支社に勤務していた煥文はのちに北京郵政総局の日本課長に転職、台湾人学生の送金はみずから処理し、同郷人がもめごとに巻き込まれればすぐ出て行って仲裁したと

いう。辛亥革命後、北京には台湾人士による「台湾同郷会」も設立され、煥文はこの会の責任者も務めていた。<sup>(15)</sup>

林海音の次女で作家の夏祖麗も、『林海音伝』執筆のために北京で知人に取材している。それによれば一九二〇年代、三〇年代、北京の台湾人は大体四十人くらいで、洪秋炎、張我軍など殆どがインテリであった。林海音らが住んでいた晋江会館には台湾の福建省出身者が一番頻繁に出入りしており、皆が福建語で会話していた。晋江会館は当時の北京社会にも、台湾にも、まして日本にも属さず、人々は互いに助け合い、世話し合っていた。<sup>(16)</sup>日本当局の監視や地元の人々の目を避けて、みずからを「番薯人」と呼び合う台湾人の姿を、林海音は「亜細亜の孤児」<sup>(17)</sup>だと書いている。林自身、小学校の入学手続きなどには台湾ではなく祖先の本籍を出身地として書いていたという。民国期の北京において、台湾人たちはある種の異空間のなかに生活していたことが窺える。

#### 四、両地

それでは次に、北京と台湾に対する林海音の叙述について、散文集『両地』から見ていきたい。林海音は著者の自序で「両地」とは台湾と北平をさし、台湾は自分の故郷、北平は育った場所であり、自分は生涯この二つの場所を離れたことはないと述べている。

この散文集は一九六六年（民国五十五年）に三民書局から出版され、計五十七編のうち台湾に関するものが三十五編、北京に関するものが二十二編収められている。台湾に関する散文には「愛玉冰」、「新竹白粉」、「台北温泉慢写」、「艋舺」、「冬生娘仔」など当地の風俗に関するものが多く、三編を除きすべて一九五〇年―五一年に『國語日報』「週末」欄に発表されている。『國語日報』社は国民政府の国語（北京語）普及政策に沿って創立された財団法人で、渡台して一カ月後の一九四八年十二月、夫の夏承楹が同社に入社し、林海音も翌年から『國語日報』

の編集となり「週末」版の主編を務める。北京語で創作できる人材が限られていた当時、林はみずから文章を書き掲載していたが、創作意欲は非常に旺盛で、一九四九年―五二年の四年間におよそ三百編近い文章を各紙に発表していたという。その多くが台湾の郷土風物を紹介したもので、渡台してきた一部の人々に好んで読まれた。<sup>(18)</sup>一方、北京に関する散文のうちほとんどは『聯合報』『副刊』に掲載されたもので、書かれたのはいずれも一九六〇年代である。台湾に関する作品が北京に関する作品よりも先に執筆されていたことが分かる。当時の新聞には林と同様大陸から来た女流作家たちの文章が多数掲載されているが、台湾の民俗に関してまとまった文章を発表した作家はほかには見当たらない。当時、台湾では国民政府による文芸政策が強力に推進されていた。二・二八事件<sup>(19)</sup>の傷がまだ癒えぬ一九四九年、国民軍を率いて遷台した蒋介石は、台湾人の「脱日本人化」を図るため、公用語を中国語に切り替える「国語推進運動」を展開し、政府の支援による各種文芸奨励賞や軍・政府の人材を動員した文芸団体が設けられ、大量の反共文芸作品が生まれた。<sup>(20)</sup>台湾ではすでに七割以上の人々に日本語が浸透しマスコミの活動もすべて日本語であったが、一九四八年にそれが全面禁止されると、沈黙した台湾人作家に代わり大陸から渡ってきた作家たちが文壇に躍り出た。林海音もその一人ではあったが、彼女のスタンスはあくまでも「追われて逃げてきたのではなく、自ら決断し故郷へ戻ってきた」のであった。台湾へ戻った当初の林海音は、故郷について調べるために省立博物館へ足しげく通い、日本語の雑誌『民俗台湾』や池田敏雄の『台湾の家庭生活』などを読み漁り、内容をノートに写していたという。実際、『両地』の散文を見ると、次のように池田の文章を参照したとみられる個所がある。

従前台湾の女孩子到了十幾歲，喜歡做一種小布人，管它叫做「冬生娘仔」。做法是很簡單的，用線香棒綁成一

個十字形，就是冬生娘仔的骨架，她小如的手掌。給它穿上短衣和褲，上面再做一個頭，描上五官，腳是纏足型的，所以做上弓鞋。不過「冬生娘仔」只有一隻腳，傳說她的嫂子很利害，曾打斷了她一隻腳。（「冬生娘仔」『兩地』一六三—一六四頁。初出は『国語日報』一九五〇年十二月三〇日）

（昔台湾の娘たちは十歳くらいになると、「冬生娘仔」と呼ばれる布の人形をよく作っていた。作り方はとても簡単で、線香の棒を十字に縛り手のひらほどの骨組みを作る。短い上着とズボンを着せて頭をつけ、目鼻と口を描く。足は纏足をしている形なので弓靴（纏足用の布靴）を履かせる。でも「冬生娘仔」には足が一本しかない。伝説では彼女の兄嫁がひどくきつい人で、足を一本折られてしまったという。）

「冬生娘仔は少女の掌大の人形で線香の脚を十字形に組合せ、これに衫（上衣）と褲（ずぼん）を穿かせる。上にはぎれをまるめて首をつくり、顔を描く。脚は隻脚で纏足の弓靴を履かせ色褲（纏足婦人の脚絆）をかぶせる。足が殊更に隻脚なのは何か理由があるに違いないが今は不明に帰している。ただ冬生娘仔は意地悪な嫂にいちめつけられ、廁につまづいて足を一本失ったのだとも云ふが、確かなことはわからない。」（池田敏雄「冬生娘仔」『台湾の家庭生活』（大空社、二〇〇二年）一七九頁）

二つの文章はかなり似通っていることがわかる。次に、台湾についての散文をもうひとつ挙げる。こちらは台北の艋舺について書いたもので、台湾の民俗が色濃いいこの地区は『民俗台湾』でもしばしば取り上げられている。

萬華和延平路是本省人聚居的地方，許多地方還保留著真正的臺灣風味。日本雖然竊據五十年，一直沒能改變



它。就拿名字來說吧，萬華是在日本大正十一年改的，原來是叫艋舺。延平路一帶日本人叫做太平町，原來的名字叫大稻埕。臺灣人一直不喜歡用日本名，提到這兩個地方，總是說艋舺，或者大稻埕。——中略——當初艋舺是臺灣北部最熱鬧的地方，臺灣有句老話兒說：「一府二鹿三艋舺」。府是臺南，鹿是鹿港，如今這三個地方都失去當日的光彩了。——中略——萬華的夜市是很有名的，到了夏天的黃昏，許多人喜歡去趕萬華夜市，這也可以說是臺北著名風情之一。遊臺北不去萬華，正像逛北平不去天橋一樣。（艋舺『兩地』一四二頁。初出は『國語日報』一九五〇年十二月二三日）

（萬華と延平路は本省人が多く住む場所で、本当の台湾らしさが沢山残っているとこである。日本は五十年間不正にここを乗っ取っていたが、ずっとそれらを変えることはできなかった。名前から見ると、萬華というのは日本が大正十一年に変えたもので、もとは艋舺と呼ばれていた。延平路一帯は日本人が太平町と呼んでいたが、もとの名前は大稻埕であった。台湾人は日本名を使うのを嫌いこの二つの場所をいつも艋舺、大稻埕と呼んでいた。——中略——当初艋舺は台湾北部で一番の繁華街で、台湾には「一府二鹿三艋舺」という古い言葉があった。府とは台南、鹿とは鹿港のことだが、いまはいずれも昔の精彩を失っている。——中略——萬華の夜市はとても有名で、夏の黄昏時には沢山の人がやってくる。これも台北ならではの風情のひとつだ。台北に行つて萬華に行かないのは、ちょうど北平に行つて天橋に行かないのと同じである。）

こちらは、なんとなく観光欄の紹介記事のようである。他にも「台北温泉漫記」や「台南『渡小月』」など台湾の名勝や名物を紹介する散文がある。中国大陆の人々にとって、台湾に渡ってくることは想定外であり、予備知識もなかったことだろう。林海音自身、台湾の市場で北京にはない南国の果物を目にし、母愛珍の流暢な台湾語を聞いてカルチャーショックを受けたというが、一方で台湾人として読者に伝える使命感を持っているように思

われる。そしてその書き方は情緒的ではなく、客観的な、記事のような書き方である。

次に、北京に関する散文のうち、城南遊芸園<sup>(2)</sup>での出来事を綴った散文を見てみよう。毎週末、乳母に連れられ見に行った芝居小屋で、タオルを放り投げる給仕や観客の様子を描いたくだりである。

但是觀眾與茶坊之間的糾紛，恐怕每天每場都不可免，而且也真亂哄。當那位女茶坊硬把菓碟擺上來，而我們硬不要的時候，真是一場無味的爭執。茶坊看見客人帶了小孩子，更不肯把菓碟拿走了。可不是，我輕輕的，偷的，把一顆糖花生放進嘴吃，再來一顆，再來一顆，再來一顆，等到大人發現時，去了大半碟兒了，這時不買也得買了。（台上、台下）『兩地』二三頁。初出は『聯合報』一九六二年十二月十五日）

（しかし、お客と給仕とのやりとりは毎日のように繰り返され、しかもすごく騒がしかった。あの女給が菓子皿を無理やり持ってきて私たちが断ると、いつも意味のない争いが展開したものだ。女給はお客が子ども連れなのを見るとなおのこと菓子皿を下げようとしなかった。もちろん、私はそうと、こっそりと落花生飴を一口の中に放り込んで食べ、もう一つ、もう一つとやっっているうちに、大人に発見された時にはもう皿の半分くらいも無くなっていて、結局買うことになったのだった。）

②に比べると非常に生き生きとした細かな描写がされており、お茶目な少女の行動に思わず笑ってしまいそうになる。これは林海音の実体験に基づいた記憶だと思われる。北京に関する散文にはほかにも秋の食物や京劇役者の子どもたち、妾の女性について書いたものがあるが、焼き栗の香り、連なって歩く子ども役者のさまや子猫と話すお婆さんの声など、どれも音や色、匂いまで伝わってくるようだ。

林海音は一体「北京人」なのか「台湾人」なのか。住み慣れた北京にしながら馳せる故郷台湾への思いについて、林は「英子の郷愁」という散文のなかで描写している。これは書信の形をとった散文で、林海音によれば、実際の手紙ではないが当時の心情に近い内容だという。第一信から第五信まで、日中戦争前夜、最中の北京から台湾にいる祖父や従兄に宛てた手紙となっている。このうちの第二信は祖父に宛てたもので、帰郷するようにとの勧めを断る手紙である。自分は中学二年生、弟妹は小学生であり、台湾に戻れば日本語を勉強しなければならないから帰らないという内容である。

我們不願意失學，但是我們也不能半路插進讀日本書的學校。而且，自從叔叔在大連被日本人害死在監獄以後，我永遠不能忘記，痛恨著害死親愛的叔叔的那個國家。還有爸爸的病，也是自從到大連收拾叔叔的遺體回來以後，才厲害起來的。——中略——媽媽非常思念故鄉，她常常說，我們的外婆一定很盼望她回去，但是她還是依著我們的意見留下來了，媽媽是這樣的善良！（「英子的鄉愁」『兩地』一二頁。初出は『台灣文芸』第一卷第一期、一九六四年四月）

（私たちは勉強をやめたくないですが、途中から日本の学校へ編入したくはありません。それに、叔父さんが大連の監獄で日本人に殺されてからというもの、大好きな叔父さんを死に追いやったあの国に対する憎しみを、私は永遠に忘れることができません。また父の病も、大連へ叔父さんの遺体を取りに行ってから悪化したのです。——中略——母はとても故郷を恋しがっており、おばあさんがどんなに私たちの帰郷を待っているだろうかといつも言うのですが、やはり私たちの意思に沿ってのこってくれたのです、母はこんなに善良なのです！）

叔父とは父煥文の末の弟で、父を頼って北京に留学に来ていた林炳文をさす。幼い林海音をかわいがってくれた叔父だったが、抗日活動に参加して日本人に捕えられ、大連で獄死させられた経緯がある。次は第三信、父の遺骨を持って先に帰郷した従兄へ宛てた手紙である。父の死後体の弱い妹や弟が相次いで亡くなり、寂しくなった家のなかで、母から台湾の話を聞く日常を書いている。

媽媽一邊向爐中添煤，一邊告訴我們說：故鄉還是穿單衣的時候。是嗎哥哥？那麼您的棉袍到了基隆豈不是要脫掉了嗎？媽媽又說，故鄉的樹葉是從來不會變黃、變枯，而落得光光的；水也不會結冰，長年的流著。——中略——還有女人們光著腳穿著拖板，可以到處去作客，還有，還有，……等等，故鄉的一切真是這樣的有趣嗎？您怎麼不快寫信來講給我們聽呢？（『英子的鄉戀』『兩地』一一三頁——一一五頁）

（お母さんは薪を火にくべながら言います。故郷ではまだ一重の服を着ているころだと。そうですかお従兄さん？それならあなたの綿入れも基隆港に着いてすぐに脱いだのでしょうか？お母さんの話では、故郷の木の葉は黄色くなったり枯れたりしないで、きれいさっぱり落ちるのだと、それから水は凍らずにいつも流れているんだと。——中略——それから女のひとたちは裸足に下駄を履いて、いつもいろんな人の家にお呼ばれするんだと。それから……、故郷の一切は本当にこんな面白いですか？なぜ早く手紙を書いて教えてくれないのですか？）

母から話を聞き、まだ見ぬ故郷に思いを馳せる様子が見てとれる。戦火が日々激しさを増すなか、母愛珍の帰郷への思いは強かったことだろう。母の思いは北京っ子として成長した林海音にも伝わったはずだが、しかし林は自分が自分として生きられる故郷にこだわり、日本化された台湾を拒み続けた。そして戻ることのできない故

郷への思慕はいつそう強くなっていったに違いない。

## 結論

林海音という作家は、その代表作『城南旧事』の映画化によって、日本また大陸においても、北京への郷愁を描いた作家という印象が強い。しかし、「比北平人还北平」といわれた林海音のその両親世代は、日本統治下の台湾から脱出し新たな発展を求めて大陸にやってきた人々であり、北京における彼らはいわば異郷人であった。彼らの故郷はあくまでも台湾だったのである。こうした台湾への思いはおのずと林海音の思考にも影響し、北京への思いとともに、長い年月のうちに複雑に織り交ぜられていった。

本論で取り上げた散文集『両地』においても、北京の暮らしへの愛着・回顧とともに、故郷台湾に対する強い思慕をみとることができる。それは手紙の形をとった文章に見られる故郷を思い描く少女の様子や、帰ってきた故郷で初めて見るさまざまな風俗の描写にあらわれている。みづから暮らした北平に対し、台湾は林にとっては見知らぬ土地であった。だからこそ林は故郷を知ろうと努力し、日本語ではなく中国語でそれらの情報を消化して、台湾の実態を把握しようと務めた。彼女が台湾に戻って真っ先にしたことは、北京を思い焦がれノスタルジーにひたるのではなく、一日も早くみづからの故郷に関する知識を得、それを北京語で執筆・紹介することだった。ただ台湾を描写した文章には、北京のそれほど真に迫った生き生きとした表現はあまりみられず、客観的な事象紹介などを中心とした内容となっている。林の場合、青春を過ごした北京への感情は自然に湧いてくるものであるが、ようやく手中に取り戻した故郷・台湾への思いとは間接的な想像上のものであり、それを実体化させ、台湾人としてのルーツの正当性を自ら認識するために、台湾について書き、大陸の人々に伝えていくこと

に使命を見出したのではないだろうか。林海音の故郷に対する意識とは、これまで日本でみられてきたような単なる北京への郷愁ではなく、二つの場所への思いが交錯したより重層的なものだったと言える。林海音の散文には『兩地』以外にも戦後の台湾を描いた作品があり、台湾では注目され始めている。それらについての考察は今後の課題としたい。

## 注

- (1) 林海音に関する日本語の論文は、杉野元子「林海音『城南旧事』雑考―映画との比較の視点から―」（『藝文研究』慶應義塾大学藝文学会 No. 七〇、一九九六年六月）、また応鳳凰「林海音著『城南旧事』―その小説と映画化された作品との比較―」（『中国現代文学―台湾からみる中国大陸の文学現象―』（小山三郎・許菁娟編著、晃洋書房、二〇一〇年）がある。ほかに山寺未希子の「林海音研究序論―林海音をめぐる女性たち―」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第九号、一九九〇年四月、九七―一一頁）がみられる。管見のかぎりでは以上だけで、『城南旧事』以外の作品を中心とした研究はみられない。

- (2) 何凡、本名夏承楹（一九一一―二〇〇二）。著名なエッセイスト。江蘇省江寧の人、北京生まれ。北平師範大学外国語文学科卒後、北平『世界日報』編集者。一九四八年妻林海音とともに渡台し『國語日報』に入社。「台湾省國語推行委員會」委員、雑誌『文星』主編、『聯合報』主編、『國語日報』主編・発行人など歴任。著作は『何凡文集』全二六巻のほか『不按牌理出牌』『夜讀雜誌』など多数。

- (3) 『城南旧事』初版は光啓出版社。一九九二年に中英対訳版が齊邦媛・殷張蘭熙により香港中文大学から出版。また一九九七年、杉野元子による日本語版が新潮社から出版。同年ドイツ語版も出版された。

- (4) 反中国共産党を主軸とした文学作品。主な作家として軍人作家の司馬中原や朱西甯、『異域』の鄧克保、『荻村伝』『華夏八年』の陳紀滢、『秧歌』の張愛玲、『旋風』の姜貴などがある。

- (5) 台湾に渡ってきた外省人作家による、大陸を懐かしむ小説。『城南旧事』のほか、潘人木『蓮漪表妹』、楊念慈『廢園舊事』、尼洛『進鄉情怯』などが懷郷小説として挙げられる。
- (6) 葉石濤『台湾文学史綱』（文学界雜誌社、一九八七）八九頁。
- (7) 同時期の女流作家に潘人木、蘇雪林、謝冰瑩、張秀亞、張漱涵、繁露、劉枋、艾雯、孟瑤などがある。
- (8) 杉野元子『林海音『城南旧事』雑考―映画との比較の視点から―』三九―五九頁。応鳳凰『林海音著『城南旧事』―その小説と映画化された作品との比較―』二三―四五頁。
- (9) 盛英主編『二十世紀中国女性文学史』（天津人文出版社、一九九五）一九三二頁。
- (10) 范銘如『如何收編林海音』（李瑞騰、夏祖麗主編『一座文學的橋：林海音先生紀念文集』台南國立文化資產保存研究中心、二〇〇二年）一六五頁。
- (11) 応鳳凰『五〇年代台湾文学論集』（春暉出版社、二〇〇四）一八九頁。
- (12) 一八九五年の下関条約で台湾、澎湖島は日本に割譲、太平洋戦争後一九四五年まで日本の植民地であった。日本統治下では日本語の使用や日本名が強制され、皇民化政策が実施された。
- (13) (一九〇二―一九五五) 台湾の文学者、作家。本名張清榮、字は一郎。台北板橋の人。二〇年代に『乱都之恋』や『糟糕的台湾文学界』を発表、台湾新文学運動の旗手と呼ばれる。一九二五年社会派新聞『台湾民報』編集となり日本当局を批判。二六年北京へ留学、北京大学などで教鞭をとり終戦後帰台。
- (14) 『北京台湾会館史話』（『台声雜誌』一九九四年九月）、『城南旧事』作者林海音青少年時代的人和事（『兩岸關係』二〇〇一）による。何標は本名張光正、一九二六年北京生まれ、中国共産黨員。大陸在住台湾人の民主派政党・台湾民主自治同盟会員。著書・編著書に『番薯藤系兩岸情』『張我軍全集』など。
- (15) 台湾同郷会が一九二六年に林宅で開かれたときの写真が、林海音『家在書坊邊』（純文学出版社、一九八七）に載せられており、父林煥文、叔父炳文をはじめ実業家や学生など十二名の台湾人が集っている。
- (16) 夏祖麗『追隨母親的足跡―我写林海音伝的心路歷程』（国立成功大学図書館館刊・第十一期・一九九二年四月）
- (17) 戦後を代表する台湾人作家の一人呉濁流の同名小説。日本の植民地下にあった台湾人知識青年を描いた。

(18) 夏祖麗『從城南走来：林海音伝』（天下遠見出版、二〇〇〇）一三二頁。

(19) 一九四七年、警察の民間人への暴行に端を發した弾圧事件。抗議する本省人に国民党軍が武力制圧をおこない、外省人との衝突が激化し全土に広がった。蒋介石はその後、厳しい言論・報道弾圧を続行、本省人知識人や共產主義者らを徹底的に逮捕、処刑。戒厳体制は一九八七年まで続いた。

(20) 応鳳凰『五〇年代文学論集』（春暉出版社、二〇〇四）四九―五〇頁。

(21) 郭豫斌『市井生活』（華夏出版社、二〇〇八）によれば、城南遊芸園は一九一八年に江西省議員の彭秀康が建設させた多種目芸能園。大小劇場が並び京劇や文明劇（新劇）、マジックショーなどが行われ、入園料二角で園内の全施設を自由に観られるスタイルで民衆の人気があつた。

（てんじん ゆうこ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）